石巻特進スクール発行の楽しく読んで学力アップと入試に強くなるお得な情報誌

第 179 号　発行日　平成 23 年 12 月 4 日

合格通信

今月の名言

可能性対して心を閉じていると、
人生の本当の恵みを見極める
ことはできないのです。

― 稲盛 和夫 ―
(京セラ創業者)

これは、塾生のみなさんと、特進スクールを訪れてくれた、小中高校生の皆さんとお問い合わせいただいたお父さん、お母さんに向けて、勉強法や受験に役立つ話題をお届けする情報誌です。

塾経営雑感②

「学力向上」という成果を得るまでには、三つの大きなハードルがあります。１つ目は「理解」です。「ああ、そうか。なるほど」とわかることです。当たり前のことですが「理解」なしに学力向上はありえません。

２つ目は「定着」です。「なるほど」と理解したことを、完全に自分のものにしなくてはいけません。それには「練習」が必要です。そして３つ目は「維持」です。

この時点で、多くの子どもたち、親たちが大きなカン違いをしています。大切なものは３つあるのに、そのうちの１つでしかない「理解」すること、「ああ、そうか。なるほど」とわかることに、気持ちが行き過ぎているのです。

「この子はよくわかっていない。だからわかるように教えてやってほしい」「この子にわかる言葉で説明してあげてほしい」このように、わかりやすく親切に教えてくれる先生ばかりを求めてしまいます。それで、そんな市況を反映して、わかりやすく、優れた授業の腕を持つ先生、そんな先生のいる塾がもてはやされるようになります。

でも、そのような塾に限り、復習する子、よく授業を聞く子たちだけを相手にし、それ以外の集中力のない子、話を聞かない子、きちんと復習しない子は、相手にされません。

けれども私はそうはいきませんでした。地元出身ですから、逃げも隠れもできません。どんな子が来ても「何とかする」という姿勢だけは持ち続けなければなりませんでした。

そこで私が決意したことは「徹底した習熟指導をします」と宣言すること。これには勇気が必要でした。そのときもすでに「特進スクールはきついらしい」そう言っている子がいる。そのようなうわさを耳にしていました。それでも「楽しいが成績が上がらない塾」では意味がありません。ですから、生徒が苦しい、つらい思いをしてもその代償として成績が上がればそれが子どもたちのためであると確信するようになりました。それだけに生徒の成績向上には全責任を持つ、妥協はできない、そうした思いで日々の指導にあたっています。

受験勉強に限らず、結果を出している人は、すべて自分に厳しく、真剣に練習を積んでいるからです。それができない子には私が代わって厳しくみてあげなければいけません。

そして、授業の中で「練習」をできるだけたくさん取り入れること。もっと言うなら、黒板を使って教えることをやめました。今では特進スクールの教室に黒板はありません。たまに補足説明や勉強の進め方を説明するためのホワイトボードがあるだけです。

私は塾を「教える場」とか「学びの場」ではなく「練習の場」「鍛錬の場」と再定義して、まったく新しい塾を作りました。もちろん大きな効果がありました。

子どもたちが成績が伸びない一番の原因は、理解力不足ではないんだ。練習不足なんだ。個別指導の塾をやりながら、長年子どもたちの様子を見てきた私の直感に間違いはありませんでした。